



甲虫ニュース

September 1998

No. 123

COLEOPTERISTS' NEWS

日本産ハナノミ科ハナノミ族概説 1¹⁾

高 桑 正 敏

はじめに

ハナノミ科甲虫は汎世界的に分布し、これまでに約 100 属 1,200 種が記載されている (平嶋ほか, 1989) から、甲虫としてはかなり大きな科の方だろう。しかし、分類学的な研究は驚くほど遅れている。第 1 に、未記載種は熱帯地方を中心に相当数が認められるようで、筆者などは既知種の数倍以上は存在していると考えているほどである。さらに、亜科や属などの高次タクサの構築も不十分で、このためいくつかの属は必ずしも安定して用いられていないし、あらたな属の創設もなお必要であろう。研究者が少ないこともその大きな理由の 1 つだが、外部形態の収斂が著しいこともあって種同定と属レベルのグルーピングがしばしば困難なこと、さらに訪花習性のない種の多くが採集困難なことが、ハナノミ科の分類学的研究を遅らせてきた要因と思える。ただし、当然のことだが、日本産に関してはかなり相の研究が進んでいる。

日本産は、これまでほとんど日本の研究者によって分類学的な研究がなされてきた。戦前は河野広道博士の独壇場であり、新種や日本未記録種の記載ばかりでなく、適切な属を創設するなど、日本産の研究の基礎を築いた。日本動物分類ハナノミ科 (1936) はその集大成であり、51 種が詳しく解説されている。また、中條道夫博士と三輪勇四郎博士、鹿野忠雄博士、大久保一治氏らも相の解明に貢献したことを忘れてはならない。戦後では中根猛彦博士と野村 鎮氏、それに中條道夫博士

の業績が著しい。中根博士は積極的に新種記載を行い、また海外での ERMISCH 博士や FRANCISCOLO 博士らの研究を適宜紹介するとともに、雑誌「新昆虫」誌上で「日本の甲虫ハナノミ科」(1957-1958) を連載し、それまでの全属全既知種

118 種を詳しく解説した。筆者もこの解説を座右の書として育った 1 人であり、博士から頂戴した別刷の 1 頁目はすでにボロボロとなってしまうほどである。一方、野村氏は 1951 年に日本と朝鮮、台湾のヒメハナノミ族を整理したのを皮切りに、1958 年には難解だった広義のクロハナノミ属を再検討するなど、精力的に日本のハナノミ相を明らかにしてきた。また北隆館の原色日本昆虫大図鑑 (1963) では、その当時の既知種 128 種を解説し、109 種を図示してこの科の理解に大きく貢献された。中條博士は戦前に引き続き、多数の新種の記載や分布記録を発表されるなど、日本産の相の解明に力を尽くされてきた。さらに、渡慶次稔氏と加藤 晃氏のすぐれた業績も見逃せない。近年になっては筆者のほか、畑山武一郎氏と清山好美氏、初宿成彦氏が分類学的な論文を著している。図鑑としては、保育社の原色日本甲虫図鑑 (1985) の中で筆者によりハナノミ族の当時の全既知種 64 種が、畑山氏によりヒメハナノミ族の同じく全既知種 102 種が簡略ながら解説された。

こうした中で、本誌に日本産ハナノミ科ハナノミ族の解説を行うことになった。この科については、前述したように、すでに中根博士により詳しく解説

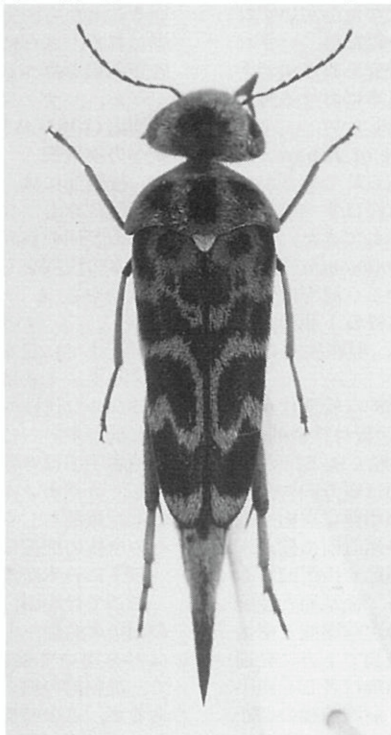


図 1. イシガキオビハナノミ *Glipa ishigakiana ishigakiana* Kôno, ♂.

¹⁾ TAKAKUWA, M., Notes on the tribe Mordellini (Coleoptera, Mordellidae) of Japan, 1.

されたことがあり、またこの族のものは原色日本甲虫図鑑(1985)を参照していただければかなりのところまでは種同定が可能と思われる。しかし、中根博士の解説当時とは日本のファウナに追加された種や所属が変更されたものも多いし、原色日本甲虫図鑑以後にあっても分類上の変更がなされた種、新たに記載された種や未知の種もいくつかある。しかも、この図鑑ではそれまでの既知種全種について同定の便がはかられているものの、一般向けの図鑑という性格上から文量的な制限があり、種の属性情報は十分には記されていない。このため、本稿では現時点で承知しているかぎりの日本産各種について分布・生態情報を含めた解説を行い、種同定と種の属性理解に役立てたいと思う。また、折りにふれ系統に関する筆者の考え方も示したい。

一方、日本産のもう1つの族であるヒメハナノミ族は、種同定ばかりでなく属・亜属のカテゴリーを含めて理解がきわめて困難なタクソンであり、これこそ詳細な解説が必要である。しかし、筆者ではとてもこの族を扱いきれないので、どなたかがいずれ解説してくれることを期待せざるを得ない。いずれにして、ハナノミ科の分類学的な研究をめざす若手研究者が数多く現れるとともに、日本における分布相解明がさらになされることを期待したい。

日本産ハナノミ科 Mordellidae of Japan

現在までに約22属約171種が知られているが、なお相当数の未記載種がある。日本産はすべてハナノミ亜科に属し、次の2族に分けられてきた。ただし、筆者はヒゲハナノミ属 *Higehananomia* Kôno を別の族として扱うべきと考えている(河野博士は独立の族とした)。また、戦前は本科の1亜科と見なされてきたハナノミダマシ類は、現在独立の科 Scrautiidae として扱われている。

ハナノミ科はいくつかの点で形態的な特殊化が著しい。とりわけ、後方に突出する尾節板は特徴的で、しばしば針状に長く伸びて先端は鋭く尖る。さらに、後基節は顕著に大きく、後腿節は縦方向に発達して他の脚部とは対照的に扁平だが頑健な様相を呈し、後腿節には通常明らかな段刻を端直前に備え、またヒメハナノミ族ではさらに後腿節や後跗節にも長短のいくつかの段刻を出現させる。後基節と後腿節の発達には、本科に特有なある種の跳躍機能と密接に関係するものだろう。体は中・後胸で下方に発達して非常に厚く、これと対照的に前胸は著しく扁平化する。頸部は頭部下面から生じ、前胸前縁の切断面の開孔部に入る。頭胸部は生時は通常の状態を保っているが、死ぬと扁平な前胸は肥厚した中胸部の前面にちょうど密着し、頭部はその上に被いかぶさった状態となるので、本科における頭胸部の形態の特殊化にはなんらかの意味があるものと思われる。ただし、後腿の段刻の存在や伸長した尾節板の役割も含め、その理由をどうにも説明しにくい。

成虫は一般にきわめて敏捷で、しかも後肢を用いて跳躍する性質がある。そのため、ネットの中に入

れても、毒管に納めるまでかなり難儀することがあるし、その過程で逃げられた経験をもつ方も一人二人ではないはずである。多くの種類は明るい間に活動し訪花習性をもつ一方で、まったく花に訪れないグループも少なくなく、また夜間に活動する少数の種類も知られる。訪花習性のないグループはしばしば朽ち木や衰弱木に飛来し、また林の中のギャップ(林内空間)の葉上に瞬間的に姿を見る。これらは後食活動を通常行わないと考えられるが、シダ植物の胞子を食べる一群の存在が明らかにされた(未発表)ほか、菌類を食べている可能性のある種類も見られる。

幼虫は多くが枯死あるいは衰弱した植物体を食べるものと推定される。ただし、ヒメハナノミ族にはキク科やセリ科などの草本植物の茎中に入ってゴールを形成し枯死させるものがあり、海外では害虫として知られている種もあるという。また、ハナノミ族にも生木の幹に集まる種が知られているほか、リュウキュウマツを加害するという種も報告されていることから、生きた植物体に依存する種もあると思われる。さらに、コゲイロカイガラタケのような硬質菌類を食べる種類も知られている。

なお、ハナノミ科の一般的な生態は高桑(1992)と初宿(1993)に紹介されている。

族への検索表

1. 後腿節には、端直前に1段刻のみをもつ; 後跗節に段刻をもたない。……ハナノミ族 Mordellini
2. 後腿節の側面には、端直前の1段刻のほかに1~数本の段刻をもつ; 後跗節にもしばしば1~数本の段刻をもつ。…ヒメハナノミ族 Mordellistenini

ハナノミ族 Mordellini

現在までに日本産は10属68種が知られている。ヒメハナノミ族に比べれば、多少とも大形で、かつカラフルな斑紋や色彩をもつ種類が多く、同定も容易な群が多い。このため分類も進んでおり、日本産の種解明率は8割以上に達していると思われる。しかし、コハナノミ属やオビハナノミ属をはじめとして未記載種もしくは日本未記録種がいくつかあり、その全体の把握にはなお時間を要するだろう。

以下に日本産本族の属への検索表を示す。

ここでは複眼、触角、尾節板、後腿節の上部の縦の刻条の有無、前・中肢の腿節とその末端節の状態などを用いて検索表を作成した。かつては国内外で、後腿節の縦の刻条の有無を重視してきた向きがあるが、この特徴は属レベルばかりでなく、種に対しても必ずしも安定していない。たとえば、コハナノミ属やキノコホシハナノミは多少とも不明瞭な刻条が認められる一方で、それがまったく認められない個体も存在するし、ホシハナノミ属にはまったく認められない種が多い一方で、多少とも不連続な刻条らしき形質を現す種がある。また、モンハナノミ属もかつてはこの刻条の有無によって細分されたことがあるが、その不確実性によって現在は1属に統合されている。複眼の細かい立毛の状態と、前・中

脛節の末端節の状態も同様である。前者では、同一の属の種であってもオビハナノミ属やホシハナノミ属のように、全面に密に被われるものからまったく無毛のものまで様々であるし、後者の場合もコハナノミ属のように、単純で先端が切断状の種から先端が深く切れ込んだ二葉状の種まで認められる。オビハナノミ属などは尾節板の状態も大きく違えている。

これらの形質の変異状態は、同属間ばかりでなく、しばしば別属間においても共通する。高次分類が十分に検討されていないこともあろうが、確かにいくつかの形質は異なった属の中で原始的から派生的な状態まで見られるのである。つまり、分岐的でなく、平行現象的である。各属への分化が始まってから、平行的に特殊化した形態を生じたものと解釈してよいのかもしれない。かつて中根博士(1958)は、ドイツのC. ERMISCH博士が上記を初めとしたいくつかの形態的特徴を組み合わせる属を創設していったことに疑問を表明したが、それはまさにこの平行現象の存在に気づかれていたと考える。いずれにしろ、分岐的な形質を探しだし、高次分類を再構築する必要があるだろう。筆者は、その形質こそ交尾器とそれに付随する器官だと考えている。

日本産の属への検索表

- 1. 雄は小あごひげに顕著な付属物を備え、末端節は棒状; 眼は大きく、頭部下面に大きく張り出し(このため背・側面から見ると頬前部を欠く)、背面より見て額より明らかに幅広い(雄)かほぼ同幅(雌); 雄交尾器側葉片は体長の割に非常に小さく、単純かつ左右でほぼ同形。……………ヒゲハナノミ属 *Higehananomia*
- 小あごひげに付属物を備えず、末端節は斧状か三角形状; 眼はより小さく、背面より見て額より明らかに幅狭い; 雄交尾器側葉片は左右で明らかに異形。……………2
- 2. 尾節板は太くて短く、ほとんど三角形状、尾節より少し長い程度; 触角端数節は幅より短い。……………3
- 尾節板はより細長く、通常は尾節より顕著に長く、もしほとんど三角形状でも末端は幅広く切断され、かつ触角端数節は幅より長い。……………4
- 3. 体は小さく、体長 3.5-4 mm²⁾; 眼は頭部下面に張り出す; 尾節板は平圧される。……………コホシハナノミ属 *Curtimorda*
- 体は大きく、体長 8.5-10 mm; 眼は通常で頭部下面に張り出さず、背面から頬前部が見える; 尾節板は後半で肥厚し、末端切断面は円形。……………ヤクハナノミ属 *Yakuhananomia*
- 4. 後脛節の上部に縦の刻条がほとんど認められない

²⁾ 以下の解説中では、体長は頭前端から翅端までを示す。本科の場合はしばしば前胸前端から翅端までの計測値を表示しているが、これは本科の種は死ぬと頭部と前胸が強く下を向く傾向が強く、頭胸部を生時のように整形することは時にかなり困難を伴うからである。しかし、比較的大形の種を多く含む本族にあって

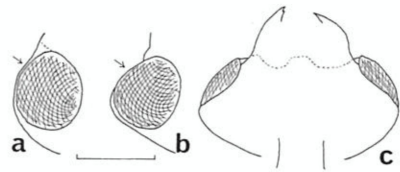


図2. 複眼の状態. a: キンオビハナノミ属 *Variimorda flavimana* (MARSEUL) の左側面, b: コハナノミ属 *Mordellaria aurata* (KÔNO) の左側面, c: ditto, 腹面(下面). Scale: 0.5 mm.

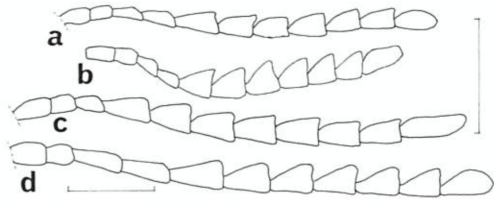


図3. 触角(♂: 右)の状態. a: コハナノミ属 *Mordellaria aurata* (KÔNO), b: クロハナノミ属 *Mordella kanpira* TAKAKUWA (TAKAKUWA, 1985), c: キンオビハナノミ属 *Variimorda miyabei* NOMURA, d: ホシハナノミ属 *Hoshihananomia kurosai* CHÛJÔ et NAKANE. Scales: 0.5mm.

- いか、あったにしても破線状。……………5
- 後脛節の上縁ないしそのすぐ外に1本の縦の完全な刻条を現す。……………9
- 5. 頭部と前胸背はそれぞれ幅よりやや長く、前胸背の後角は角ばる; 尾節板は見た目の第2-4腹節の合計の長さよりも短い。……………ホソハナノミ属 (新称) *Stenomordella*
- 頭部と前胸背はそれぞれ長さよりも幅広く、前胸背の後角は丸まる; 尾節板は見た目の第2-4腹節の合計の長さよりも明らかに長い。……………6
- 6. 体はほとんど黒色、背面に明瞭な斑紋を欠く; 触角は第5節以降で顕著に鋸歯状、4節は3節とほぼ等長。……………クロハナノミ属 *Mordella*
- 背面に明瞭な白~黄~赤色の斑紋を備える。……………7
- 7. 体は太型で小さく、体長 3-5.5 mm; 眼は頭部下面に張り出し、側方からは頬前部の背面と下面とを分ける稜が見えない。……………コハナノミ属 *Mordellaria* (1)
- 体は大きく、体長は通常 5-14 mm, 5.5 mm 以下の場合体は明らかに細い; 眼は通常頭部下面にほとんど張り出さず、側方から頬前部の背面と下面とを分ける稜が見える。……………8
- 8. 触角は第4節以降で鋸歯状; 前・中肢はより細

は頭胸部の整形が技術的にそれほど困難とは言えないし、前胸から翅端までだと感覚的に体長を把握することはかえって難しい。このため、ここでは他の甲虫におけると同様に体長を示すことにした。ただし、中根猛彦博士(1958)も述べているように、誤差が大きいことを念頭に入れていただきたい。

く、中跗節第1節は2-4節の和より短い；眼は立毛を備える。……キンオビハナノミ属 *Variimorda*
 — 触角は第5節以降で鋸歯状；前・中肢はより太く、中跗節第1節は2-4節の和と同長かより長い；眼は立毛を備えないか、ときに多少とも備える。……ホシハナノミ属 *Hoshihananomia*
 9. 体は小さく、体長3-5.5 mm；眼は頭部下面に張り出し、側方からは頬前部の背面と下面とを分ける稜が見えない。……コハナノミ属 *Mordellaria* (2)
 — 体はより大きく、体長5-16 mm；眼は頭部下面にほとんど張り出さず、側方からは頬前部の背面と下面とを分ける稜が見える。……10
 10. 小あごひげ末端節は斧形；前・中肢の脛節は非常に細く、末端節は単純で先端は切断状、中肢脛節は長く、第1節は残る2-5節の和より短い。……モンハナノミ属 *Tomoxia*
 — 小あごひげ末端節は二等辺三角形；前・中肢の脛節は通常の太さ、末端節は二葉状、中肢脛節は通常の長さ、第1節は残る2-5節の和より長い。……オビハナノミ属 *Glipa*
ヒゲハナノミ (オナシハナノミ) 属 *Higehananomia* Kôno

1属1種の東洋熱帯特産属。検索表に示したほか

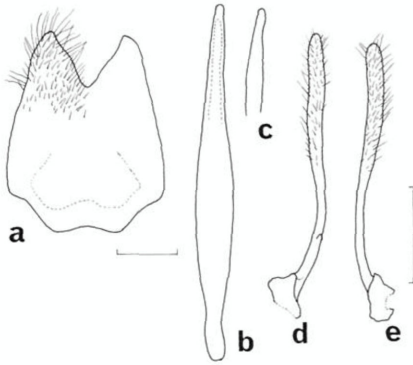


図4. クライロヒゲハナノミ *Higehananomia palpalis* (Kôno)♂. a: 第8腹板, b: 交尾器中葉片, c: ditto, 側面, d: 交尾器側葉片 (左), e: ditto, (右). Scales: 0.5 mm.



図5. クライロヒゲハナノミ *Higehananomia palpalis* (Kôno) の大隅諸島以北の分布.

にも、前胸側縁は短く、その前端付近は顕著に厚みをもち、尾節板は三角形状、交尾器中葉片も本科にあってはかなり太短い、などの特徴を備える。これらの形質のうち、雄小あごひげに付属物をもつ点や眼の特徴以外は、いずれも本亜科の原始的と考えられる性格を示していることから、本属が系統的に非常に古いものであることは疑いが無い。とくに雄交尾器は他属と構造を違えており、筆者は別の族として扱うのが妥当と考えている。

クライロヒゲハナノミ *Higehananomia palpalis* (Kôno)

体長8-16.5 mm. 灯火に集まる習性をもつ一方で、明るい間での採集例がほとんどない点、また複眼の個眼が大きく粗いという形態的特徴から、日本産本族中で唯一の夜間活動性の種類と考えられる。

日本では八重山諸島で多く得られているが、九州以北での記録は少ない。本州では和歌山県生石山、奈良県春日山、三重県尾鷲市、愛知県蒲郡市、岡崎市、知多市、静岡県天竜市、神奈川県横須賀市、逗子市、横浜市、東京都上野、杉並区、千葉県市川市などで記録されているものの、幼虫食入木の人為的な移動による結果の可能性もあり、どこまでが確実に土着のものかは定かでない。高桑(1976)は少なくとも四国以南で土着と見なしたが、紀伊半島までは確実に自然分布であろう。台湾産(基準産地)や大陸産、ボルネオ産は日本産とめだつた形態差は見いだせない。

幼虫形態は知られていないようだが、筆者はかつて徳之島産のシイの枯れ木から脱出した多数の個体を確認した(高桑, 1976)。

分布: 本州 (関東以西)、四国、九州、伊豆諸島(御蔵島、八丈島)、琉球列島(屋久島、大隅諸島黒島、奄美大島、徳之島、沖繩本島、石垣島、西表島、与那国島); 台湾、南・北ベトナム [未発表]、タイ、マレー半島、ボルネオ [未発表]。

主な引用文献

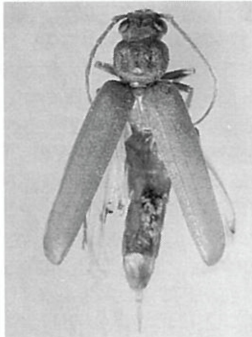
畑山武一郎, 1985. ハナノミ科 (part). 原色日本甲虫図鑑, 3: 387-398, pl. 67. 保育社.
 平嶋義宏・森本 桂・多田内 修, 1989. 昆虫分類学, vii + 597. 川島書店.
 河野廣道, 1936. 花蚤科. 日本動物分類, 10(8-1): i + 1-4 + 1-79. 三省堂.
 中根猛彦, 1957-1958. 日本の甲虫 [33]-(39). 新昆虫, 10(1)-11(1).
 野村 鎮, 1963. ハナノミ科. 原色日本昆虫大図鑑, 2: 247-255, pls. 124-128. 北隆館.
 初宿成彦, 1993. ハナノミという昆虫. *Nature Study*, 39(10): 3-6.
 高桑正敏, 1985. ハナノミ科 (part). 原色日本甲虫図鑑, 3: 376-387, pls. 65-66. 保育社.
 高桑正敏, 1992. 花に來ないハナノミ. 神奈川虫報, (99): 22-31.

(神奈川県立生命の星・地球博物館)

○フランス産のワインに浮いていたムネツヤサビカミキリ

近年食品の品質管理は非常に高度化・厳格化しており、異物が混入したまま販売されることは極めて稀となっている。筆者は最近、フランス産のワインに浮いていたというムネツヤサビカミキリ *Arhopalus rusticus* (LINNÉ) の標本を入手したが、現代においては非常に珍しい事例だと思うので記録しておきたい。

1♀, 1988年(ワインの製造年), フランス共和国 Côte-d'Or 県 Beaune 町(ワインの製造地), 滝井乾・桜採集, 筆者保管。



フランスには本種を含めて3種の *Arhopalus* 属の種が産する。上記の標本は、1) 附節第3節が根元付近まで二分される、2) 複眼の個眼間に毛がある、3) ♀の触角が上翅の中央を越えない、という特徴を備えることから、*rusticus* と同定した。標本が入っていたワインは、1997年10月に東京都内の百貨店で購入されたものである。標本が破損しておらず、コルク栓には異状がなかったことから、コルクに穿孔していたものではなく、最初からワインに浮いていたものと思われる。ワインが赤ワイン(びんが濃緑色)であったことから、製造元で見逃され、そのまま店頭に並んだものであろう。

末筆ながら、貴重な標本を恵与された滝井夫妻と文献の入手に便宜を図って下さった高桑正敏氏に心からお礼申しあげる。

参考文献

BENSE, U., 1995. Longhorn beetles. Illustrated key to the Cerambycidae and Vesperidae of Europa. Margraf Verlag, Weikersheim. pp. 204-205.

VILLIERS, A., 1978. Faune des Coléoptères de France. I. Cerambycidae. Editions Lechevalier S.A.R.L., Paris. pp. 230-235.

(埼玉県浦和市, 芳賀 馨)

○旧神奈川県立博物館に収蔵されていた貴重な甲虫数種について

筆者らは旧神奈川県立博物館の資料を整理中にくっつかの興味深い種を見出したので記録しておく。

・オオヒラトツクリゴミムシ 1♂, Tamagawa, Tokyo, 3. June 1938, T. Kuzaki leg.

本種はおもに灯火に飛来したものが得られているが、その生態は謎に包まれている。全国的にも近年の採集例をほとんど聞かない。

・スジゲンゴロウ 2♀♀, 静岡県金谷町茶業試験場, 10. VIII. 1950. 伊藤義穂採集。

本種も近年の採集例を聞かない。同時にゲンゴロウ(1♂, 同データ), コガタノゲンゴロウ(1♂1♀, 同所, 8. VIII. 1950)も得られている。他の昆虫の顔ぶれから灯火に飛来したものと思われる。

(神奈川県立博物館, 苅部治紀・高桑正敏)

○種の保存法に基づく保護増殖事業が講じられる甲虫

「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(いわゆる種の保存法)は、平成4年6月に施行された比較的新しい法律で、我が国に生息する絶滅のおそれのある種に対して、捕獲および譲渡等の規制、生息地等の保護、保護増殖事業等によりその保存を目指すものでもある。現在、動植物をあわせて54種がその指定を受けており、昆虫類ではベッコウトンボ、ヤンバルテナゴコガネ、ヤシゲンゴロウおよびゴイシツバメシジミの4種が国内希少野生動植物種に指定されている。また、ベッコウトンボは平成8年6月に、ヤンバルテナゴコガネとゴイシツバメシジミは平成9年4月に保護増殖事業計画が策定され、法律に基づいた保護増殖事業が講じられることとなった。

このうちヤンバルテナゴコガネは、現時点で保護増殖事業計画が策定されている唯一の甲虫であり、以下のような計画の目標や事業内容等が挙げられている。

〈保護増殖事業計画の概要〉

種名: ヤンバルテナゴコガネ

策定者: 環境庁長官, 文部大臣, 農林水産大臣

目標: 生息状況等の把握・モニタリングを行い、その結果等を踏まえ、生息環境の改善や密猟防止対策の強化等を図るとともに、人工繁殖技術の確立、人工繁殖、適切な方法での繁殖個体の再導入を行うことにより本種が自然状態で安定的に存続できる状態になること

事業の区域: 主として沖縄県北部の本種の分布域

事業の内容: 1. 生息状況等の把握・モニタリング
2. 生息地における生息環境の維持・改善
3. 人工繁殖及び個体の再導入
4. 生息地における密猟の防止
5. 普及啓発の推進
6. 効果的な事業の推進のための連携の確保

本種の生態については、従来から一部の研究者により調べられてきたが、地域を定めず指定された国指定天然記念物であるため、調査に際してもさまざまな制約が存在した。保護増殖事業は始まったばかりであるものの、調査研究に法的根拠が与えられたことで、生態の解明や保全技術が一層進展し、本種の真の保護につながっていくことを期待したい。

(株)環境指標生物, 川那部 真)

カブトムシの属名について

三宅義一

カブトムシは最初 *Scarabaeus dichotomus* LINNAEUS, 1771 として記載されたが、古くにはその属名に *Dynastes* や *Xylotrupes* などが用いられたこともあった。しかし現在では広く *Allomyrina* が使われている。

ある会合で黒沢良彦博士にお目にかかった際、*Allomyrina* はボルネオやマラヤなどに分布する *pfeifferi* (いわゆるサビカブトムシ) を基準種として設立された属である、日本のカブトムシなどに適用するのは不適当だと思うが、どう思うか、という質問を受けた。私も同感である旨お答えしておいた。その後、ふたたび別の会合でお会いしたとき、カブトムシの属名について調べたか、という催促を受けた。恥ずかしいことながらそのときまだ調べていなかったのである。

さて前述した *Allomyrina* は、REDTENBACHER (1867) が *pfeifferi* を記載した際に設立した属 *Myrina* が、すでに用いられたことのある属名、つまり下位異物同名であるという理由で、ARROW (1911) によって提唱された新名である。このとき ARROW は、♂の前爪が割れていることなどを述べているが、カブトムシなどと近縁であることは念頭になかったらしく、中南米に分布する *Megasoma* (いわゆるゾウカブトムシ) といちじるしく似ていることを強調している。

今日、カブトムシの属名に *Allomyrina* がほぼ統一して使われるようになったのは、ユンクの甲虫目録の中で ARROW (1937) が突然、彼自身が挙げた前記のような *Allomyrina* の特徴を無視して、カブトムシや中国産の *Xylotrupes davidis* (いわゆるシナカブトムシ) をこの属に編入したことによる。*Allomyrina* が他のカブトムシ族 *Dynastini* の昆虫といちじるしく異なる点は、体表面が密に羽毛状の鱗毛で覆われていることである。カブトムシを含めて他の属ではすべて、体表が平滑か、先細の微毛で覆われている。また、♀は前脛節に痕跡的な第4歯を持っている。よく知られているように、ARROW はカブトムシ亜科をもっとも広く、詳しく調べた研究者のひとりであり、いわばこの類の権威であった。その後これらの種について調べた PRELL (1934) や ENDRÖDI (1967) にも、属名については ARROW の処置を踏襲して現在にいたっている。

さて、カブトムシという昆虫は、*Allomyrina* とどのように違い、どのような属名で分類されるのであろうか。*Allomyrina pfeifferi* は、前に挙げた特徴のほかに、前胸突起が柱状に発達している点で、薄く扁平なヒメカブトムシ属 *Xylotrupes* やオオカブトムシ属 *Chalcosoma* あるいは新大陸の *Megasoma* などに比べて、カブトムシにより近縁である。しかし、*pfeifferi* の前胸突起は低く、前基節の会合

部の後方に位置しているのに対して、カブトムシなどではそれが前基節間に延び、したがって前基節間が広く離れている。その属名については *Allomyrina* の同物異名として扱われ、日本でも KÔNO (1931) によってカブトムシや台湾のツノボソカブトムシの属名として使われたことのある *Trypoxylus* MINCK, 1920 を当てるのがよいと思われる。MINCK は、♂の頭角先端が4尖頭であること、♀の頭部に3瘤起、前胸背板に凹陷があること、後脛節の(基部の)横隆起にある棘状の突起が1個であることなどの点で、当時おかれていた *Xylotrupes* (ヒメカブトムシ属) とは異なるとして、カブトムシ *dichotomus* と *davidis* を基に *Trypoxylus* を創設した。上記の特徴のうち、前胸背板の凹陷を除けば、*davidis* ではなくて *dichotomus* を基準としたことがわかる。ここで問題になるのがシナカブトムシ *Xylotrupes davidis* DEYROLLE の処置である(論文としては FAIRMAIRE と共著の形になっているので、FAIRMAIRE 単独、または共著として引用されることもあるが、種ごとに著者名が明記されているので DEYROLLE のみにするのが正しい)。この種の♂の外形はカブトムシに似て突出部がよく引縮まっているし、前胸突起も柱状で、その前方もいくらか竜骨状に隆起している。しかし♂の頭角の先端が単純なY字型で、柄部の中間に十字架状の短い突出部がある特異な外形を持っているだけでなく、♀の前胸背板後方中央部に深い凹陷があること、♂では背面がにぶいさめはだ状の光沢をもっているのに対して、♀では上翅先端付近以外は無毛できわめて滑らかであること、後脛節の2個の横隆起には♂♀ともそれぞれ2個の棘状の突起があることなどは、近縁の諸属には見られない特徴である。

そこで、*dichotomus* と *davidis* とを単に同属間の別種とするよりも、すでに PRELL (1934) が *Allomyrina* の亜属として提唱している *Xyloscaptes* を *davidis* の属名として復活するのが妥当だと思う。以上のことを要約すると次のようになる(亜種に関しては省略)。

- Trypoxylus dichotomus* (LINNAEUS) カブトムシ
- Scarabaeus dichotomus* LINNAEUS, 1771
- Dynastes dichotomus*: BURMEISTER, 1847
- Xylotrupes dichotomus*: SCHOENFELDT, 1884
- Trypoxylus dichotomus*: MINCK, 1920
- Allomyrina dichotoma*: ARROW, 1937; ENDRÖDI, 1985
- Xyloscaptes davidis* (DEYROLLE), comb. nov. (シナカブトムシ)
- Xylotrupes davidis* DEYROLLE, 1878
- Trypoxylus davidis*: MINCK, 1920
- Allomyrina (Xyloscaptes) davidis*: PRELL, 1934

Allmyrina davidis: ARROW, 1937; ENDRÖDI, 1985
Allomyrina pfeifferi (REDTENBACHER) (サビカブトムシ)

Myrina pfeifferi REDTENBACHER, 1867

Allomyrina pfeifferi: ARROW, 1911; ARROW, 1937; ENDRÖDI, 1985

研究の動機づけをしてくださった黒沢良彦博士、研究材料について御援助頂いた黒佐和義博士、山屋茂人、秋山黄洋、葛 信彦の諸氏に深く御礼申し上げます。

(東京都多摩市)

○ヒサゴコフキゾウムシの追加記録

ヒサゴコフキゾウムシ *Parasitones gravidus* は、箱根から得られた5頭の標本を基にして、SHARP (1896) によって新属新種として記載された種である。シベリア東部や済州島 (MORIMOTO & LEE, 1992) にも分布するようだが、国内における記録は少なく、筆者の知る限りでは、模式産地の他に長野・群馬・福島・宮城 (森本, 1984; 渡部, 1990; 吉武, 1995) の4県から数例が報告されているに過ぎず、草地から採集されるという事以外の生態的知見は一切不明であった。筆者は1995年の8月中旬から10月初旬にかけて、宮城県仙台市の一地点において、道路脇のヤブマメ *Amphicarpaea bracteata* ssp. *edgeworthii* var. *japonica* から本種の成虫を多数採集することができたので、本種の追加記録としてその採集状況とともに報告する。また、静岡県産の標本を検査する機会に恵まれたので、併せてここに報告する。

96頭、宮城県仙台市下愛子, 10. VIII. ~ 4. X. 1995, 筆者採集; 1頭、静岡県富士宮市, 27~28. IX. 1990, 採集者不詳。

宮城県仙台市の採集環境は道路脇の草地で、ヤブマメ・ツルマメ・クズ・アザミ・ヨモギ・カナムグラ・各種のイネ科草本などで構成されていた。本種はその中の一塊のヤブマメから集中して得られ、葉の後食および食痕・葉上における交尾などが確認できた。同地には他にもヤブマメが多く見受けられたが、それらからは、採集期間を通してわずかに3頭が得られたに過ぎなかった。何故その塊にだけ集中してみられたかは不明である。

末筆ながら、原稿を校閲してくださった九州大学の小島弘昭氏にお礼申し上げる。

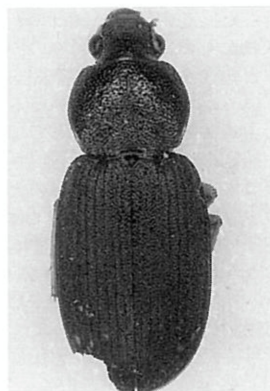
参考文献

- SHARP, D., 1896. The Rhynchophorous Coleoptera of Japan. Part IV. Otiorynchidae and Sitionides, and a genus of doubtful position from the Kurile Islands. *Trans. Ent. Soc. Lond.*, 1896: 81-115.
 森本 桂他, 1984. 原色日本甲虫図鑑, (IV): 281.
 渡部 徳, 1990. 宮城県の甲虫: 304.
 MORIMOTO, K. & LEE, C. E., 1992. Curculionidae of Cheju Island, Korea, with Descriptions of three new species (Insecta, Coleoptera). *Esakia*, (32): 1-18.
 吉武 啓, 1995. 宮城県におけるゾウムシ18種の記録. *インセクトマップオブ宮城*, (2): 37-40.

(東京農大, 吉武 啓)

○オガサワラアオゴミムシの採集例

オガサワラアオゴミムシ *Chlaenius ikedai* KASAHARA は、1991年に小笠原諸島母島産の1♀をもとに記載されたアオゴミムシで、原記載以後発表されている採集例はないようである。筆者らは1998年に母島を訪れた際、本種を採集しているので報告する。



1頭(死体)、小笠原村母島沖村, 4. VII. 1998, 苅部幸世採集。

母島滞在最終日、民宿の部屋を掃除していたおりに床に落ちていたゴミのなかから発見されたもので、状態からみてかなり以前に部屋に入りこんで死んだものと考えられる。採集地は海岸に近い最近造成された宅地で、周辺は草地になっている。死体発見後、周辺の草地で探索を試みたが、追加することはできなかった。

なお、南方でのゴミムシ採集では通常灯火の見回りが有効であるが、小笠原諸島では外来種であるオオヒキガエルが極めて多く、街灯の下には常に数頭から10頭前後の個体が陣取っており、彼らより先に昆虫を採集するのはまず不可能である。また、本種のような地表性の昆虫はオオヒキガエルのエサとなる危険が高いと思われ、本種の発見例が異常に少ないのはその食害の影響のためとも考えられる。

参考文献

- KASAHARA, S., 1991. Three new carabid beetles from the Ogasawara Islands. *Elytra, Tokyo*, 19: 243-250.

(神奈川県小田原市, 苅部治紀・苅部幸世)

○埼玉県におけるオナガカツオゾウムシの記録

オナガカツオゾウムシ *Lixus moiwanus* は、Kôno (1928) によって北海道産の2♀を基に記載された種である。ドクゼリに集まることが知られているが(森本他, 1984), 比較的採集例の少ない種で、筆者の知る限り埼玉県からの記録は浦和市からの一例(藤多, 1987)が知られているにすぎない。筆者は埼玉県産の本種の標本を所持しているため、追加記録としてここに報告する。

2頭, 東松山市毛塚, 31.VIII.1997, 石川忠採集。

採集地は住宅と水田に囲まれた湿地で、アシ・ヒメガヤ・スゲ類などが繁茂しており、かなり良好な環境が残されているが、近いうちに宅地開発で消滅してしまうということなので、同県在住の豊田浩二氏と新井志保氏の案内で、先輩の石川忠氏と共に採集調査を行った。その際に、同行の石川氏の手によって採集されたものである。当日の同氏の採集方法は、アシなど植物を踏み倒して空間を作りながら湿地内に入り込み、地表を這っているものや衝撃で落下してきた虫を採集するというものであった。踏みつけられた植物の中にドクゼリも混ざっていたので、本種はそこから落下してきたものと思われる。なお、本種の生息するような湿性環境は各地で激減しており、本種の採集は今後ますます困難になると予想されることを付記して結びとしたい。

末筆ながら、採集地の案内をしてくださった豊田浩二・新井志保両氏、採集に同行して下さり、貴重な標本を恵んでくださった石川忠氏に感謝申し上げます。

参考文献

- 藤多文雄, 1987. 浦和市付近の甲虫類-ゾウムシ科①. 昆虫と自然, 22(6): 22-24.
 Kôno, H., 1928. Einige Curculioniden Japans (Col.). *Ins. Mat.*, 2: 163-177.
 森本 桂他, 1984. 原色日本甲虫図鑑, (IV): 286-287, pl. 56, f. 14.

(東京農大, 吉武 啓)

○チョッキリゾウムシ生態不明種の採集例(続)

本誌122号に佐藤光一氏と私は、生態不明種4種について報告したが、さらに1種、明らかになったことがあるので引き続き報告する。同定して下さい、発表をすすめられた沢田佳久博士に、深謝の意を表す。

5. キバライクビチョッキリ *Deporaus vossi* SAWADA, 1993

[生態: 不明]

17頭, 神奈川県箱根町大湧谷, 1998年5月14日; 41頭, 同所, 1998年5月28日。

すべてアセビから採集した。念のため周囲の他の樹種も調べたがまったくいなかったので、アセビが推定ホストとみなされる。

5月14日のは出現初期らしく殆どの個体が腹部未成熟, 5月28日のは1個体だけが未成熟だった。

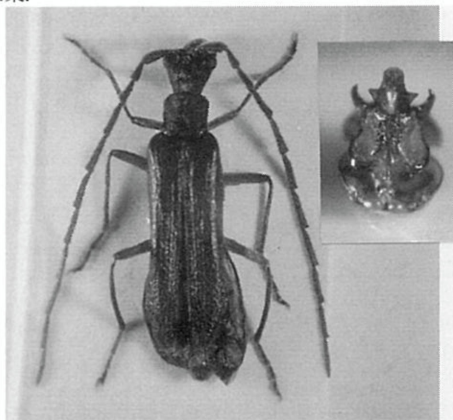
日本のチョッキリゾウムシをまとめられた1993年の沢田博士の論文では、本種の検鏡標本産地は四国(高知)・本州(広島, 鳥取)であった。とび離れた神奈川でみつかったことから、少なくとも四国・中国地方との中間でさらに発見される可能性がある。

(神奈川県横浜市, 堀川正美)

○コウベツマキジョウカイ平倉の記録

筆者は本誌第119号に三重大学平倉演習林の未記録の甲虫24種を報告したが、新たに種名が決定した表記のものがあるので、ここに報告しておきたい。

Malthinus kobensis (LEWIS) コウベツマキジョウカイ 1♂, 三重県美杉村平倉, 7.VI.1997, 平野幸彦採集。



本種は兵庫県, 奈良県, 岐阜県などに分布するが、かなり稀な種と思われる。なお、♀と思われる個体もあるが、確定はできない。参考のため、♂の交尾器の写真もあげておく。

末筆ではあるが、同定をお願いした高橋和弘氏に厚くお礼申し上げます。

(神奈川県小田原市, 平野幸彦)

○生木から脱出したピロウドコメツキダマシ

ピロウドコメツキダマシ *Pterotarusus mouhoti* FLEUTIAUX (1924, *Ann. Soc. ent. Fr.*, 42: 305-306) は、東南アジアからニューギニアにかけて広く分布する綺麗な種である。久松(1989, 原色日本甲虫図鑑, 3: 46, 51 (pl. 9) 第3刷)によれば、日本からは西表島で採集された1個体の雄しか記録がないようである。筆者は、広葉樹の生木から脱出した本種を検査する機会を得たのでここに報告しておく。コメツキダマシのほとんどが、枯れ木や朽ち木に入ること考えると、本種の食性は興味深い。

1頭, 西表島古見, 1-7.VI.1998。

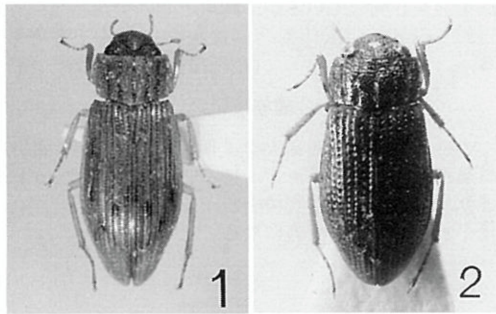
本種の標本入手に際し、お世話になった東京都の桑久仁雄氏に感謝したい。

(東京都世田谷区, 鈴木 互)

○本州初記録を含む青森県産セズジガムシ類 2 種

従来、本邦産セズジガムシ類については本州から *Helophorus auriculatus* SHARP セズジガムシが、北海道からは *H. mukawaensis* N. WATANABE キタセズジガムシと *H. matsumurai* NAKANE エゾセズジガムシの計 3 種が知られていた (WATANABE, 1983; 佐藤, 1985). その後 NILSSON, KHOLIN & ANGUS (1995) は極東ロシアと日本のセズジガムシ類をまとめた論文の中で、それまで東シベリアや極東ロシア、中国北部等に分布が知られていた *H. nigricans* POPPIUS を日本から最初に江別太 (北海道江別市) より記録し、さらに青森県コケヤチ湿原 (西津軽郡車力村) 産のエゾセズジガムシも本州から初めて報告した。

このように国内からは現在 4 種類 (北海道 3 種、本州 2 種) のセズジガムシ類が分布している事が明らかになったが、このたび筆者らは本州では未記録のキタセズジガムシと本州から上記の 1 例しか知られていないエゾセズジガムシを青森県内の湿地より採集しているので報告する。なお、キタセズジガムシの学名は WATANABE (1983) によって記載された *H. mukawaensis* が用いられてきたが、NILSSON *et al.* (1995) はこの種を極東ロシアに広く分布する *H. sibiricus* と同種であるとの見解を示しているため、ここではそれに従った。



1. *H. sibiricus* (MOTSCHULSKY) キタセズジガムシ
9 頭、青森県三沢市仏沼 (小川原湖付近の湿地)、
30. V. 1994, 豊田浩二採集, 保管 (図 1)。

本種は水生甲虫類であるにもかかわらず、この時得られた個体は水中からではなく、全て草上より見出されたものである。時刻は午後 2 時頃のこと、かなり強い直射日光が注ぐ中、湿地に生える草本植物にしがみついたり、草本づたいにのぼってくる個体が観察された。この日は天気が良く、ほとんど無風で気温も割合高かったことから、飛翔のために水中から出てきたものとも思われたが、詳細は不明である。ちなみにこの湿地では分布が局所的なオオハンミョウモドキやマークオサムシ等といった湿地性の甲虫類も得られており、比較的良好に環境が保たれていることがうかがえた。また筆者の一人である尾崎は、隣接する六ヶ所村の尾駱沼で青森県農業試験場の市田忠夫氏が 1990 年 8 月 19 日に

灯火に飛来したセズジガムシを採集したことを記録 (尾崎, 1995) したが、再検の結果この個体は本種であることが判明したので、この場を借りて同定の誤りをお詫び申し上げると共に訂正させていただきたいと思う。なお、これら以外にも小川原湖付近で最近本種が確認されているとの情報もあるので、この地方では今後さらに新産地が見つかるであろう。

2. *H. matsumurai* NAKANE エゾセズジガムシ

46 頭、青森県北津軽郡中里町若宮, 29. III. 1997, 尾崎俊寛・鈴樹亨純採集, 保管 (図 2)。

39 頭、同県西津軽郡稲垣村下繁田, 29. III. 1997, 尾崎俊寛・鈴樹亨純採集, 保管。

今回、本種の分布が確認された地点は、岩木川下流域に位置する場所で、いずれもマークオサムシの産地でもある。中里町では、広大なアシ原の中にある水たまりで見出され、水中の草本にしがみついている個体も観察されたが、多くは水たまりを棒でかきまぜたところ、水面に浮かんできたものや、前方に向かって真っ直ぐに泳ぎ出す個体を採集したものである。稲垣村では、透明ながら底に泥がたまっていた小さな水たまりを棒でかきまぜることにより、同じように多数の個体を見出すことができた。ここでは日中は泥の中に潜っているようであったが、この水たまりは、最も深い所で 3 cm 程と浅く、しかも開けた道端にあることから、晴天が続くと干上がってしまうのではと思われた。これまでのところ 2 地点でしか見つけることができなかったが、いずれも個体密度は高く、この種も岩木川流域には広く分布しているものと思われた。

また、今回報告した 2 種のセズジガムシ類のように国内では従来北海道のみから知られていたハマベオオハネカクシ、エゾヒサゴメツキ、キベリマルヒサゴメツキ、ヴァンダイクホソベニボタル、イワハムシなどが最近本州北部から相次いで記録され、これら以外にも未発表ながら明瞭な追加種の標本が得られていることから、今後もあまり調査の進んでいない海岸部や近年生態系が注目されるようになった湿地を中心に幾つか意外な種が発見されるものと思われる。いずれにしても、マイマイカブリのミトコンドリア DNA を用いた系統解析やアカガネオサムシの染色体に関する最近の研究でも、この地域は本州よりも北海道と関係が深いことが示唆されている事と合わせて、これらの甲虫類は、本州の北端部と北海道との関係を考察する上で極めて重要な手がかりになるであろう。

末筆ながら、この報告をするに当たり文献調査等いろいろと御教示してくださった札幌市の堀 繁久氏、むつ市の荒木 哲氏、東京農業大学大学院の岸本年郎氏ならびに石川 忠氏、採集に同行していただきデータを提供して下さった弘前大学の鈴樹亨純氏に厚く御礼申し上げます。

引用文献

NILSSON, A. N., S. K. KHOLIN, & R. B. ANGUS, 1995. Fau-

nistics and species richness of water beetles of the genus *Helophorus* (Coleoptera, Helophoridae) of the Far East of Russia and Japan. *Jpn. J. Syst. Ent.*, 1(2): 217-221.

尾崎俊寛, 1995. 東北地方未記録のセスジガムシについて. *Celastrina*, (30): 21.

佐藤正孝, 1985. 原色日本甲虫図鑑 (II). セスジガムシ科: 206-207. 保育社, 大阪.

WATANABE, N., 1983. A new species of the genus *Helophorus* FABRICIUS (Coleoptera, Hydrophilidae) from Japan, with notes on the Japanese species. *Proc. Jpn. Soc. syst. Zool.*, (25): 43-47.

(埼玉県嵐山町, 豊田浩二・秋田県大館市, 尾崎俊寛)

◇採集例会報告◇

今年度(1998)の採集例会は、日本甲虫学会との合同で、6月27日、28日に奈良県大峰山系の和佐又山において開催された。鞘翅学会から19名、甲虫学会から15名で、合計34名の方々が参加された。

頂上まで1km ちょっとのところに和佐又山ヒュッテがあり、小屋の前が草原で、ミズナラやブナの林に囲まれ、頂上までが採集コースである。ご自身も甲虫類を採集されるそこのご主人の岩本二郎さんのご配慮により、静かな自然に囲まれた快適なヒュッテを、ほぼ貸切りに近い形でエンジョイすることができた。

夕食の後、恒例の懇親会が開かれ、関東と関西の虫屋が、一堂に会しての一人一話を楽しんだ。流れ解散してナイターへ流れた後も、話はさらに盛り上がったようで、12時過ぎても話は尽きないグループも結構あった。毎度のことであるが、虫の話をしているとどうしてこんなに時間が早く過ぎてしまう



日本鞘翅学会 合同採集会
日本甲虫学会
1998年6月27-28日
奈良県 和佐又山

のかという思いの残る、楽しいひとときであった。

ナイター採集は、岩本さんのご好意により、照明を三基付けてもらった。惜しいことに、この日は昼過ぎからの強風で、条件の方は必ずしも良好とは言えず、カミキリでいえば、コブヤハズやゴマフキマダラ程度であった。またこのミヤマクワガタは大型であり、70ミリを超える♂も得られた。甲虫学会が、昨年ここでもう少し早い時期に採集会を開催した際には、ケブカマグソコガネが多数飛来したとのことであるが、今年はピーティングで数頭得た程度で、ナイターへの多量飛来はなかった。梅雨の晴れ間にあたった幸運もあるが、タイワンホソコバネの豊産や、関東の人間には貴重なオオクボカミキリ等、カミキリ屋にとっては結構楽しめる採集地であった。

甲虫学会は来年も7月10~11日に同じ場所での採集会を計画しているが、関東と関西の親睦という目的も含めて、来年も合同採集会にする予定である。(企画担当幹事, 大木 裕)

◇編集後記◇

つい先日、東京農業大学より博士号を授与された高桑正敏氏によるハナノミ科ハナノミ族の解説が始まりました。大原昌宏博士のエンマムシ類の解説に続くすばらしい手引書になることと思います。

日本鞘翅学会

会費(一カ年)6,000円, 次号は1998年12月下旬発行予定

発行人 佐藤正孝

発行所 日本鞘翅学会 東京都新宿区百人町 3-23-1
国立科学博物館昆虫第1研究室

電話 (3364) 2311, 振替 00180-3-401793

印刷所 (株)国際文献印刷社

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました。その他、採集、製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

F A X (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社